

愛宕山の愛宕神社

宇敷 辰男

地元練馬のシニアサークル正月第一週の行事で、今年は初詣として港区の愛宕神社に参拝した。ここは天然の山としては二十三区内で一番の高さを誇る愛宕山（標高二五・七呎）の上であり、徳川家康が慶長八年（一六〇三年）江戸幕府開府に伴い防火の神様として祀った神社である。全国に八百〜九百の愛宕神社があるが、総本社（徳川幕府）は京都の愛宕山に鎮座している。

NHK総合テレビの番組「にっぽん百低山」で、一月の第三週に京都の愛宕山（標高九二四呎）が放映された。撮影されたのは昨秋で、私もそのころ錦秋の古都を訪れた。「化野念仏寺」（あたしの）まで足を伸ばし、トンネルを抜けた嵯峨清滝町で紅葉を楽しんだ所が、愛宕神社の表参道登山口であった。

音を立てて流れる清滝川の清流の上に、橙や黄色や真紅の紅葉が迫り出し、白い雲が懸かる山の麓は、真っ赤な紅葉が燃え上がるように曇り空を明るく彩っていた。

私はここで引き返したが、番組では全長四キロの登山道を二時間半かけて登っていた。参詣道の途中に幹の内側が焼け焦げた杉の巨木が現われ「火燧権現跡」として伝わっていた。平安時代に天皇が暮らす内裏が落雷で火事になった時、愛宕山に黒雲が懸っていたので荒ぶる火の神を鎮めるため愛宕山が祈りの場になった。

九十九折の急な坂を登って黒門をくぐって境内に入り、急な階段を登ると社殿に到達する。山頂でしか手に入らない「阿多古祀符、火迺要慎」、火伏の神の御札を求めて都人は山をくだる。

京の愛宕神社は、きつい二四〇段を登ると都が一望できる。江戸の愛宕神社は、傾斜三十七度で急こう配の石段を八十六段登ると、昔は江戸の城下が見渡せた。

勝海舟と西郷隆盛が薩摩藩蔵屋敷で会談し、家康ゆかりの愛宕山に勝が西郷を誘い、山頂から城下を見渡し「江戸の町を戦火で包むことは避けよう」と話し合った。

江戸城無血開城も愛宕山の火伏の神のご加護であったに違いない。